



第70回枚方教組定期大会

教員不足、上からの課題、過密多忙な働き方 つながりあい、声をあげることによって変えていこう

枚方教組は5月29日に定期大会を開催。学校が多忙な中、組合員が学校の現状やそれぞれの置かれている状況を交流しあい、社会の動きの中で何ができるかを、活発に論議しました。

有馬委員長 何のために先生になったのか

先生になった原点に立ち戻り、大切にすることを

冒頭に有馬委員長から、5/29の大教組定期大会で、府下各地の組合で若い組合役員が、万博問題、市教委・校長へも働き方改革に積極的に取り組んだり、新聞にも紹介されたパワハラ問題の取り組みなど、活気ある取り組みに触れることができたことにふれ、枚方でも取り組みを進めようと呼びかけました。

また、大教組大会の発言でも紹介された、金八先生のモデルともされた三上満・元全教委委員長の言葉を紹介。教師としての出発点、子どもたちや先生を「資質・能力」で見るとはならず、不完全な中でも互いにぶつかり合い、理解し合い、手を差し伸べ合って力を合わせることで、いろんなことを乗り越えていける、本来の学校・先生の在り方を今一度立ち戻ることの大切さを訴えました。

討論・交流にあふれる思い、「人が足りない」、「大量移動で学校混乱」...

グループ討論では、多忙すぎて、職場でも自分の思いを出しにくい中で、あふれるような思いや、職場の実態が次々だされました。

■とにかく人が足りない、様々な任用や配慮が必要な先生が多い中、実質5つの分掌を2人で回さざるを得ない。

■市教委の方針変更で大量の市内異動で、分掌運営が困難になり校長も対応に苦慮している。来週の修学旅行も変更つづきで日程もこれからの状態。

■学校運営も疑問に思っている、多忙な中でほかの先生への配慮からつい引き受けざるをえなくなり、どんどんしんどくなる。

グループ交流で、話が尽きず、時間が足りないほど、学校の現状や、働き方、聞いてほしい思いが次々と出てきていました。

菅書記長 力を合わせて、声を上げれば変えられる

つながりあい、一緒に考えることで、声を上げていこう

菅書記長からも、多忙で周りを見渡したり、振り返ってじっくり考える余裕がなく走り続けているが、子どもや教職員の困難と密接に関連する社会や政治の動きに目を向けることが重要になっている。みんなで集まって、直接このような思いを出し合い、力を合わせることで、声を上げていけば変えていくことができるのは、この間の、組合の取り組みからも明らかと、さらに組合の輪を大きくして、働き方改革や教育の在り方について、みんなで考えあい、声を上げていこうと呼びかけました。

みんなのえがお署名（文科省予算要求への要請署名）

教員不足、多忙化解消 根本解決には

教員大幅増、少人数学級拡大、残業代支給の仕組みを

教員処遇見直しで中教審特別部会の審議まとめにみられるように、部分的な働き方改革や新しい職の新設、わずかばかりの手当て増額では全く解決には程遠い校とはだれの目にも明らかです。

審議まとめの中で、形だけは、教員定数増や少人数学級の必要性をあげているものの、具体性、計画性はなく、文科省任せのあいまいな表現にとどまっています。

分散登校で明らか、20人学級、学習負担の大幅な軽減で

子どもも先生も笑顔になれる、みんなが学校に行こうと思える

コロナ感染の初期に、一斉休校明けで一時期分散登校が行われ、現場の教職員は初めての風景を目の当たりにしました。

「20人以下学級」状態で教室にはスペースにも子ども先生の心にも大きなゆとりができ、大きな声を出す必要もなく、ゆったりとした中で、子どもたちは先生や周りの子どもに質問したり、たがいに教え合ったりしながら授業ができていました。

あれだけ多かった不登校の子どもが、分散登校の時期には登校することができ、みんなで過ごす楽しさに触れることができていました。

先生たちも、テストや競争的で厳しい評価にさらされず、子どもと接すること自身によるこびや充実感を感じることができました。

カタカナの難解なメソッド、ICT コンテンツより 先進国平均並みの教員増、少人数学級を

子どもにも、現場の先生たちにも何をしても必要なのは、カタカナ言葉の難解なメソッドや ICT コンテンツよりも、先進国平均並みの教員増、少人数学級であることを忘れてはなりません。

日本の学校教育への公的支出(対 GDP 比)は OECD38か国中最低ランクを続けています。これをせめて先進国平均並みにするだけで、約 4 兆円の教育予算は倍増になります。教員増も少人数学級も一気に実現できます。

逆に言えば、先進国平均のさらにその半分の予算、教育条件で、教職員も子どもたちも我慢を強いられ、その上に世界トップクラスの学力、教育成果を求められてきたこととなります。

これで、学校に深刻な弊害が起らないわけがありません。

「みんなのえがお署名」で、教職員と保護者・市民の共同を広げよう

「みんなの笑顔署名」は来年度の政府予算に対し、文部科学省が必要な事業、予算規模を政府に要求する内容について、要請を行う署名です。教員定数、少人数学級拡大、時間外手当支給などの項目を掲げています。

文部科学省が政府に要求して初めて、必要な予算や事業が検討のテーブルに乗ることになります。給特法見直しの内容についても盛り込まれます。

根本的な子どもや教育の困難、教職員の過密多忙な働き方の解消、教員不足の解消に向けて、保護者、市民とともに現場の実状を広めて、力を合わせて文部科学省に声をあげていきましょう。[オンライン署名⇒](#)



給特法見直しの中教審特別部会・審議まとめ

「調整額上乘せ、新たな職、手当増額・・・」に現場の批判・疑問

一方で教育委員会に勤務時間管理責任、休憩時間の措置の内容も

5月13日に中教審の特別部会が、教員不足への対応から給特法・教員処遇の見直しについて審議のまとめを公表しました。「定額働かせ放題」の批判が強い給特法の見直しは50年ぶりのまたとない機会でした。

しかし、出てきた審議まとめの内容は現場からは、これでは何も変わらない、わずかの調整額の上乗せで時間外勤務も続けさせるのかという声が聞かれます。

教育委員会も文科省も「政策は間違っていない、失敗を認めない」？

教員過重負担、多忙化は社会の変化だけが原因？ 自らの政策への反省こそ

「我が国の行政には、・・・現行の制度や政策は間違っていないと考える、いわゆる「無謬性神話」が存在する」として、このことが課題解決を困難にさせる(行政改革推進会議・ワーキンググループ報告 2022. 5.14. など)と政府内でもこれまで度々指摘されています。

中教審特別部会の審議まとめでは、多忙化、教員不足の背景として①子供の課題が複雑化・困難化、②家庭や地域の変化、③保護者や地域からの要望、期待が高さをあげ、結果として、学校や教師の負担が増大してきたとしています。

しかし、ここには、文科省や教育委員会が上からの課題を次々ふやし、厳しい人事評価、子ども保護者アンケートも乱用して、「顧客満足度」を引き上げるような政策、学校教員の裁量権を狭める政策が根底にあることを見事に欠落させています。

「教員の仕事は高度な専門性、裁量性」あるなら、ふさわしい扱いこそ

審議まとめでは、時間外手当を支給しない枠組みを続けるにあたり、従来通り教員の仕事の特殊性(高度な専門性と裁量性)をあげています。

審議まとめも指摘するように先進国の教員は、ほとんど時間外手当は支給されていません。しかし、先進国の教育予算は日本の倍以上あり、教員数、学級定員も比べ物にならないぐらい恵まれています。

教育行政が学校に次々課題を増やして、具体的な教育活動にまで拘束や指示を出すようなことはなく、教員の教育活動は自由で裁量権が認められます。長期休業中や授業時間以外の出勤さえ自由な勤務の裁量も当たり前となっています。定期的な市内異動すらなく、授業の進め方は各教員にゆだねられています。

これらの条件には全く触れずに、行政の都合で従来の枠組みを続けるときだけ教員業務の特殊性を強調すること自身が、政策の誤り、矛盾の根源です。

「教師に高い専門性」の一方、「免許なくても先生に」を拡大???

ついこの間まで「免許更新制」だったのに、あまりの手のひら返し

審議まとめの中で、教員確保の方策の一つとして、免許がなくても社会人が教壇に建てる「特別免許」の積極的な授与、活用拡大。免許のない社会人を特別非常勤講師の活用促進、さらには社会人がすぐ教員免許を取りやすくして教壇に建てるようにする、民間企業の従業員をそのままの身分で3年程度の期限教員として働ける制度の検討まで求めています。

ついこの間まで、教員の資質向上だ、先生の確保だと、免許更新制で苦しめられ、複雑な手続きで何人も先生が免許失効、失職に追いやられていたことから、あまりの手のひら返しに、現場の教職員にとって、開いた口がふさがらない内容といえます。



その場しのぎの、行政のご都合で制度変更させられて、犠牲になるのは子どもたちと現場の教職員です。

教育委員会に労務管理責任、休憩時間保障、インターバルの提言も

委員会内の横断的な取り組み、固定観念にとられない現場の判断で実行を

特別部会の審議まとめについて、不十分さや問題点がクローズアップされる一方で、まとめの中では「勤務時間管理は、労働法制上、服務監督教育委員会等に求められている責務」と強調して、それにふさわしいとりくみをもとめています。

また働き方改革で「教育委員会事務局内において部局横断的な取組となるため、・・・、中心となって総合調整機能を発揮する担当を明確化すること」を教育委員会に求めています。枚方でも担当課によって働き方改革への温度差の違いに現場が戸惑い、混乱する従来ありがちだった事例への対応が強調されています。

さらに、あいまいにされ、放置されている休憩時間(昼休憩)も、適正な時間に休憩時間がとれるように、教育委員会としての取り組みを強調しています。

他にも長期休業期間中のテレワーク、業務の持ち帰りを行わない原則の再確認、11時間程度のインターバルなども合わせて提言しています。

とりわけ、一連の働き方改革を進めるにあたり、

■スクラップアンドビルドを改めて徹底し、従来の慣習や固定観念にとられることなく、試行しながら、「まずは取り組む」ことを優先し、柔軟かつ機動的に見直しを重ねていくことが重要である。

■その際、学校現場においても、学校の判断により実行できる改善の取組を重ねることで、多くの教師が「変わってきた」「自ら変えることができた」という実感を持つことができるようにしていくことが重要である。と強調しています。

財務省の審議会は調整額10%にさえ反対！？

必要なのは、教員増、少人数学級拡大と現場の裁量権の拡大

審議まとめでは、教員の業務負担軽減のための方策で、教員定数増や少人数学級拡大にも触れていますが、具体性がなく、あいまいなものにとどまっています。

さらに、財務省の審議会は5・21日に公表した建議で、中教審の特別部会の示したわずかな調整額引き上げにさえも反対を表明しています。

教員の業務負担軽減、多忙・過密労働解消のために、現場の教職員が一番必要としているのは、何より巨運定数の大幅増、少人数学級の拡大です。現場の負担と犠牲に胡坐をかき、必要な条件整備を先送りして次々課題を現場に追わせてきた、行政や政治の在り方が根本的に転換することが必要です。

みんなのえがお署名ひろげ、

現場教職員、保護者、市民の力で、子どもも先生も笑顔の学校を

政治、行政まかせで、子どもや現場教職員が本当に求める改革は期待できません。給特法見直しの具体化、法改正を2024年度内と文科省は予定しています。

教員定数、少人数学級拡大、時間外手当支給、教育予算の大幅増を求める「みんなのえがお署名」を広げて、現場の教職員、保護者、市民の共同の力で、本当に求められる改革を実現していきましょう。

第2回まなび庵 6月14日(金) 19:00枚方教組組合事務所2階

「保護者をつながりあい、信頼を広げる、アイデア・実践交流会」

どなたでも参加できます。当日参加歓迎